書評『英語で大学が亡びるとき』
英語教育のプロ中のプロによる、無邪気な「英語力信仰」に対する痛烈な批判

投稿者 つくしん坊 トップ 500 レビュアー 投稿日 2016/3/27

著者は 1944 年生れの東京大学教養学科卒で、高校や大学の英語教師経験、アメリカの大学客員研究員の経験があり、独自の効果的な英語教育法（寺島メソッド）も編み出した、英語教育のプロ中のプロである。その著者が、現在の教育界（大学を含む)、文部科学省、一流企業を覆う、無邪気な「英語力信仰」を痛烈に批判していることが極めて興味深く、かつ示唆に富む。

著者の主張は、英語教師の「三つの仕事」「三つの危険」（p.58）というキーメッセージに集約される。「三つの仕事」とは、「英語だけが外国語ではない」ことを教える、「英語教育を学び続ける夢」を育てる、英語の「学び方」・「転移する力」を育てる、である。一方、「三つの危険」とは、英語による「自己の家畜化」、「学校の家畜化」、「国家の家畜化」、である。本書が、英語教育論を超え、思想論・文化論までの射程を持つものであることがよく分かる。

各論として、著者はもちろん英語教育そのものが要らないと主張しているのではない。言語教育への深い洞察とその限界の理解なしに、「英語力さえ伸ばせば、研究者の研究力、日本の経済力、国際力が伸び、グローバル人材が育つ」という無邪気な「英語力信仰」の害を説いているのである。真に創造的で世界に認められた人々（例えばノーベル賞受賞者）は、日本における研究の結果として世界に問うべきコンテンツ（研究成果）を発信したからこそ、独創性を高く評価されたのであるという単純な真実に注意を促す。その証明として、近年多くのノーベル賞受賞者を輩出している名古屋大学の「物理学研究室憲章」が、研究室内の上下に隔てがない自由な討論を保障していること、またこのことが研究の幅と質を高めるのに有効だったと、益川敏英氏が証言していることを挙げている。このような視点から、京都大学における「外国人教員 100 人計画」は教育の質を落とすと同時に日本人教員の仕事を奪う愚策として、強く批判している。

著者は、そもそも戦後の英語教育がアメリカの「対日文化工作」として、日本の学生・知識人たちを文化的な植民地として支配する目的の下に進められたことを説く。さらに、アメリカの大学はその学力や学風から、日本人が留学に値するか疑問であるとする。また、英語による教育にどっぷり浸かると、その激しい競争や「ディベート」により、好戦的な人間を育てる傾向があるとしている。なるほど、単純な「英語力信仰」がいかに無邪気で無防備なものであるかがよく分かる。

評者が本書を読み、蒙を啓かれあるいは納得したことが二点ある。第一点は、上述の「対日文化工作」に京大の著名教授である吉川幸次郎氏と高坂正顕氏はじめ、多くの学者たち

が関わっていたという事実である（p.182）。これを読み、高坂氏およびその「弟子筋」のほとんどが従米を基調にした保守主義者である理由がよく分かった。

第二点は、元東京大学教育学部教授・藤岡信勝氏が在米研究の前後で思想的に 180 度変身したことである（p.186）。渡米前の藤岡氏は、革新的な教科教育法に熱心な左派系研究者だったという。それがアメリカから帰国した途端、「自由主義史観研究会」や「新しい歴史教科書をつくる会」などを立上げ、極右派の論客として「大活躍」し始めたことはよく知られている。藤岡氏の元同僚はこの変身を次のように評している（p.187）。藤岡氏は、「アメリカの教育界におけるナショナリズム」というテーマで、1 年で学位論文を書くと意気込んで渡米したが、あえなく挫折して帰国し、その直後から「自虐的な日本人」と主張し始めた。元同僚は、「藤岡氏の方がよほど自虐的」と酷評している。本書は、「歴史修正主義者」が同時に親米・属米主義者であるという日本独自の思想風景の背後に、アメリカの文化工作の可能性を示唆している。評者はこの説明を読み、「歴史修正主義者」たちに付きまとう胡散臭さの本質的な理由を理解した。彼らは、「愛国」とは正反対の動機で動いているのである。

本書の内容はタイトルから想像される英語教育論を遥かに超え、戦後日本における思想論・文化論に対してユニークな視点を提供している。